



： 卷 頭 言 ：

「こめきり」

(財)日本植物調節剤研究協会 理事
日産化学工業(株) 常務取締役

猪飼 隆

知っている方はどの位おられるでしょうか。私は先日まで知りませんでしたが、山形県から入手した、うるち米を薄くきしめん状にひき延ばした生めん、熱湯に3秒間浸せばもはや食べ頃という、いわゆる米粉食品であります。少々餅感覚の食感がめんつゆやねぎの味に絡まっておいしい。また、3秒というところが斬新であります。

このところ全国的に普及、一般に販売されている“米粉”は、旧来の上新粉より細かい粒子になっており、水と馴染み易く工夫され、例えば、牛乳と混ぜてホワイトソースを作るのによく、さらにはグラタン料理に使う、などと愚妻までもが嘯くのです。

また、報道は、オーストラリア産の小麦の生産、品質が気象の変動で安定しないので、国内生産の米粉パンをもっと普及しろ、とのたまっていますが、これがもし、パスタ類や、らーめん、ぎょうざ、に展開されてゆけばかなり面白くなると思いますが、品種改良が必要かも知れません。

先だつての「稲わら」の問題もさることながら、これだけ減反で踏みつけられたわが愛する田んぼを、なんとかもっと見直そうという動きが遅まきながら始まっています。

世界的には食料難に苦しむ人々が大勢いるのに、減反して生産抑制するという行為はおかしい、という一見正当な主張がありますが、それだけでは問題の解決にはなりません。現在各方面で、食料、農業問題についての検討がなされ、農政改革も多面的に検討され始めておりますので、いずれ大きな方向が見えてくるものと思われれます。

一方、お米の商品価値は食べてもらって初めてその価値が決まるわけですから、ただ“米を

食え”という“消費”の概念だけではなく米及び米周辺の商品価値をいかに創造してゆくかという姿勢とそれなりの覚悟が必要でしょう。商品開発にどのくらい投資が必要なのか、定かではありませんが、所得補償以外にも金の遣い道は幾多もあるでしょう。

さて、私たちが携わる農業の事業は将来どうなる？というのが、もともとの本題ですが、果てしなく続く雑草や病虫害との戦いは終わることがありません。昨今の経済情勢下にあっても農業の事業というものはあまり大きな変動には見舞われていません。パイが突然大きくなることもありませんが、急激に雑草、病虫害が無くなることもありません。急激なマイナスの変化はむしろ、世情や行政に起因する人為的な要因によるものであります。年々複雑化する問題と、対応した人為的な変化は、現在の世情と過去からの積み重ねとの間の齟齬に端を発しているのかも知れません。もっとも、中には私たちの理解し難いケースもあり、苦戦を強いられます。

農業メーカーとしては、日本の農業の議論が大きく育ち、そのなかで農業を有効、適正に使用するというコンセンサスが得られていくことを念願しています。

昭和20年には一千万人飢餓撲滅を目指して再スタートした日本の農業ですが、喉もと過ぎて熱さを忘れてから幾年経ちましたでしょうか。農業はしっかり適正に使用されることが大事であり、生産や品質が保たれ、商品としての農作物の生産意欲が一層向上する頃には、これに付随して農業の事業も自信をつけていくことが出来るでしょう。

「こめきり」だけではなく、多くの新商品の出現が楽しみです。